



ふれあいひろば

新潟市民病院
広報委員会

〔患者とともにある全人的医療〕

新潟市民病院アートプロジェクト第二弾 ～ぷちぷちさかなプロジェクト～



緩和ケア内科 田中 萌生



皆様、外来棟と南棟をつなぐ2階の渡り廊下の装飾はご覧になりましたか？昨年はお花の花壇だったものが今年はお魚がおよぐ回廊になっています。お花やお魚が少しずつ増えていっていることにお気づきになった方もいらっしゃるかと思います。

新潟市民病院では、新潟大学教育学部芸術環境講座の先生と生徒さん達のご協力のもと、ホスピタルアートを開催しております。美しい絵画やオブジェを飾るという展示の仕方もありますが、当院のアートはただ設置するだけのものではなく、患者さんや職員たちが参加してひとつのものを作り上げる、日々変化するアートです。自分の作った作品が他の方々の作品と一緒にすることで大きな世界へと広がっていく。これには、「ひとりじゃないよ」「私も頑張るから、あなたも頑張る」「大変な状況にいる人の力になりたい」そんな想いがつながっていけるようにとの願いがこもっています。

2022年4月に開催した「第1回アートプロジェクト」は、コロナ禍で人と人との接触をできるだけ避けなければならなかったため、各自ピンク色の紙でお花を作っていました。それを他者の作品と一緒に飾ることで「人と人との繋がり」を感じてもらえたら、と計画したものでした。

第2回目の今回は、コロナ5類移行となり面会制限や外来の入場制限も緩和されたため、もう一度最初の趣旨に立ち返り、作品作りにおいて新潟大学の学生さんに作り方のワークショップを行なっていただき、患者さん、学生さん、医療スタッフ間での交流ができる形で行いました。

今回のテーマは「海」です。現在渡り廊下の窓辺には、患者さんと学生さんがワークショップで一緒に作成したぷちぷち（梱包材）のお魚たちが、季節の太陽の光をあびてキラキラと泳いでいます。今後も随時ワークショップを行う予定です、皆様ぜひご参加ください。



新潟市民病院手術室の紹介

手術部長 西巻 浩伸

当院の手術室は外来棟の3階に位置し、全部で12室あります。【図①】

消化器外科、心臓血管・呼吸器外科、脳神経外科、整形外科、産婦人科、耳鼻咽喉科、泌尿器科、小児外科、乳腺外科、形成外科、皮膚科、眼科、歯科口腔外科、腎臓・リウマチ科などが手術を行っています。

対象となる患者さんも、生まれたばかりの赤ちゃんから100歳を超える高齢者まで幅広く、2022年度は約6,000件の手術が行われました。

そのうち約900件は緊急手術であり、県内各地の医療機関から依頼されることも多く、予定手術を行いながら柔軟に対応しています。

手術は医師だけでは行えません。看護師や臨床工学技士、診療放射線技師、手術室専属の薬剤師など多くのスタッフが協力し合うことによって1つの手術が成り立っています。

ここ3年間に渡るコロナ禍の中、手術件数は1割ほど減少しましたが、これまでに手術室内での感染拡大は生じておらず、

一度たりとも業務をストップすることはありませんでした。

手術室として厳重な対策を講じ、スタッフ一人一人がそれを遵守した結果だと考えており、新型コロナウイルス感染症が5類に移行した後も気を抜くことなく対応しています。

近年の手術は低侵襲化が進み、腹部の手術はお腹を大きく切開することなく、ドーム状にお腹を膨らませて、中をカメラで見ながら医療機器を操作する腹腔鏡（ふくくうきょう）手術が、どの診療科でも主流となっています。

さらに消化器外科や泌尿器科においては、手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」を用いて、より高度で複雑な術式であっても低侵襲かつ安全に行えるようになってきました。【図②】

他にも整形外科の脊椎を固定する手術では、「O-アーム」と言って手術をしながらCTスキャンを行える装置を用いることにより、骨を固定するスクリューを正しい方向、深さに導くことができるようになりました。【図③】



【図①】手術室概観

他の診療科においても、安全・確実な手術を行うための技術革新は日々進んでおり、手術室スタッフも研鑽に努めています。

来年度には13番目の手術室、「ハイブリッド手術室」が設置されることとなり、すでに工事が始まっています。

その完成により、心臓カテーテル検査・治療などを行う血管撮影室でしかできなかった正確な画像診断が手術室

でも可能となり、心臓を切開せずに大動脈弁を取り替える手術など、より高度で低侵襲な心臓・血管内治療が行えるようになることが期待されています。

当院手術室は高度な医療技術とチームワークにより、患者さんに安心感と信頼感を持って手術を受けていただけるよう、日々努力しています。何かご質問やご要望がありましたら、お気軽にお問い合わせください。



【図②】「ダ・ヴィンチ」による直腸癌手術



【図③】「O - アーム」を用いた腰椎固定術

放射線技術科 神田 英司

車の運転をする際、よく通る道と初めての道では運転する緊張感が違いますか？

初めての道を運転する際、カーナビゲーションでカーブの形状や道順がわかっているならば、その緊張感は和らぎ安全かつ回り道せずに目的地に到着できることができるのではないのでしょうか。

私たち診療放射線技師は主にレントゲン撮影・CT検査・MRI検査などの撮影業務やがん治療を主とする放射線治療を仕事として行っています。

あまり知られていないかもしれませんが、検査の後にワークステーションというシステムを駆使し3次元（立体的）な画像を作成する仕事にも多くの時間を費やしています。

様々な3次元画像を作成しますが、ここでは手術を支援する「手術支援画像」について紹介させていただきます。

冒頭で記述した、運転の緊張感の違いですが“見たことがある（既視感：デジャブ）”という経験が緊張感の和らぎと安全につながっていると考えられています。

外科手術の際も、事前に血管や臓器を3次元的に“見たことがある”という経験が、執刀する医師にとってより安全で適切な手術を行うために役立つと言われています。

また、人体の血管構造などは個人差が大き

いので、その走行（血管がどのように分れ、どこへ向かっているか）を個人ごとに3次元的に把握することも重要です。【図①】

血管の走行だけではなく画像処理を用いた肝臓切除のシミュレーションでは目的の切除を行った場合、肝臓全体の何割くらい切除してくるのかなどの情報も提供しています。

【図②】

最近では鏡視下（腹腔鏡と呼ばれる内視鏡を使用する方法など）や、ロボット支援下での患者さんに負担の少ない低侵襲手術が増えています。この方法は、患者さんの皮膚面を切開する範囲は小さく、難易度は高くなりますが、内視鏡で拡大して観察できるのでより精密な手術が可能です。

このような場合に、「手術支援画像」というカーナビゲーションでいう地図のようなものが事前にわかっているならば、医師はより詳細に手術計画をたて、患者さんにとってより安全で適切な医療を提供することができます。

さらに様々なシステムと手術支援画像を組み合わせるとリアルタイムにナビゲーションすることも可能となっています。

少し前に放送されていた「ラジエーションハウス」とは違って、病院ではあまり目立たない存在の診療放射線技師ではありますが、画像のプロとして医師と協力しながら、診断のみならず治療・手術に直結するような患者さんにとって有益な医療を提供していきます。

少しだけでも診療放射線技師に興味を持っていただけますと仕事の励みになります。

検査室では短時間の対応が多いかもしれませんが、よろしくお願ひします。

図① 肝臓の手術支援3次元画像



図② 肝臓の手術支援3次元画像



当院のホームページにも、バックナンバーを掲載しています。

新潟市民病院 ふれあいひろば

検索

発行元：新潟市民病院 広報委員会

新潟市中央区鐘木463番地7 Tel 025-281-5151